14　次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、後半の「論」以下は作者の論評である。 〈鹿児島大〉　二〇一六年度出題

永の頃にや、京都小川の町といふわたりに一人あり。衣装に絵かく事をＡわざとしければ、絵屋とぞいひける。老いたる父を養うて孝なり。父酒を好む。絵屋夫婦しばしば買ひてすすむ。しかれども父その家の貧しきを知りてければ、飲めども心楽しまず。あるいは飲まず。絵屋これを憂へ、夫婦ひそかにはかり、年の暮れ行く程、こがね入るべき箱ひとつ求めいでて、Ｂ石瓦を内にみててよくしたため、夫婦これをきて父が前に出て、「過ぎし年まうけし物、いつにもましてればなどみなつくのひて、これほどぞあまり侍る。Ｃこれを酒のあたひとなさば、生きてましますほどは、えも尽くしはじ」といへば、父うち驚きて、喜びに堪へず。それよりこそ、思ふさまに酒をば飲みけれ。老い朽ちて死にけるまでにまことに富めりとのみ思ひけるほどに、Ｄいささか憂ふる色なかりしとぞ。

　　論

人は、かりにもそらごとすべからず。よろづの道、これをいましめたり。た

だし、老いたる父母の心を慰め、憂へをとどめんとては、やむことを得ずし

て、そらごとする時もあるべし。そらごとせぬに誇りて、父母の憂へ恐るべ

き事をも口にまかせて言ひ散らすは、人の子の心にはあらず。絵屋がそらご

と、それＥむべならずや。そらごとによりてＦ誠あらはる。

（『仮名本朝孝子伝』による）

（注１）　寛永……江戸時代前期の年号。

（注２）　かきて……担いで。

（注３）　債などみなつくのひて……借金などすべて返済して。

問１　傍線部Ａ「わざとしければ」、傍線部Ｄ「いささか憂ふる色なかりしとぞ」、傍線部Ｅ「むべならずや」をそれぞれ現代語訳せよ。

問２　傍線部Ｂ「石瓦を内にみててよくしたため」について、以下の問いに答えよ。

①　「石瓦」は何の代わりなのか。本文から抜き出せ。

②　何のためにこのようなことをしたのか。説明せよ。

問３　傍線部Ｃ「これを酒のあたひとなさば、生きてましますほどは、えも尽くし給はじ」を、指示語の内容と主語を明らかにして現代語訳せよ。

◎問４　傍線部Ｆ「誠あらはる」とあるが、そのあらわれた「誠」とは何か。本文に即して六〇字以内で説明せよ。

# 【解答と採点基準】

問１　Ａ＝生業としたので

「生業としていたので」も可。

　　　Ｄ＝Ａ全くＢ心配する様子はＡなかったＣということだ

Ａ＝４〔「少しも〜ない」も可。〕

Ｂ＝２／Ｃ＝４

　　　Ｅ＝もっともなことではないか

「道理にかなったこと」でも可。「〜ではないか」と訳していなければ減点５。

問２　①＝こがね

②＝絵屋夫婦が、Ａ家にお金があるかのように思わせて、Ｂ貧しい状況を理解して遠慮する酒好きの父に、Ｃ心置きなくお酒を飲んでもらうため。

Ａ＝３〔「お金の心配がない」も可。「見せかける」内容でなければ０。〕

Ｂ＝３〔「貧しさに気兼ねして」も可。「酒好き」がなければ減点１。〕

Ｃ＝４〔「お金の心配をせず」「飲みたいだけ」も可。〕

問３　箱にいっぱいの金を酒代にしたら、父上が生きていらっしゃる間は、使い果たすことはおできにならないであろう

「箱いっぱいの金」の内容がなければ減点５。「酒代にしたら」など仮定の表現になっていない場合は減点３。主語「父上」を欠く場合は減点５。「生きていらっしゃる」「おできにならない」で尊敬の表現ができていない場合はそれぞれ減点２。

問４　Ａ真実を言って嘆かせるのではなく、父母を安心させ心配させないために、Ｂやむを得ず噓をつくという行為にあらわれた孝行心。（57字）

Ａ＝５〔「父母の憂いをなくす」「父母の心を慰める」などの内容であれば可。〕

Ｂ＝５〔「孝行心」「親を思いやる心」を欠く場合は全体０。〕

# 【現代語訳】

　寛永の頃であったろうか、京都小川の町出水というあたりに一人（の男）がいた。衣装に絵を描くことを問１Ａ生業としたので、絵屋勘兵衛といった。年取った父を養って孝行者であった。父は酒を好む（人であった）。絵屋夫婦はしばしば（酒を）買って（父に飲むよう）勧めた。しかし父は絵屋の家が貧しいことを知っていたので、（勧められた酒を）飲んでも心は楽しくなかった。（また）あるときは（酒を勧められても）飲まなかった。絵屋はこのことを心配し、夫婦で密かに相談し、年の暮れの頃、黄金を入れるべき箱を一つさがし出して、石瓦を箱の中にいっぱいに入れてきちんと整え、夫婦はこれを担いで父の前に進み出て、「今年利益として得たものが、例年以上にありますので、借金などすべて返済して、これだけあまりました。問３これを（父上の）酒代にしたら、（父上が）生きていらっしゃる間は、使い果たすことはおできにならないであろう」と言ったところ、父はすっかり驚いて、喜びを抑えることができない。それ以来、（飲みたいと）思うだけ酒を飲んだ。老い衰えて死ぬまで本当に（自分は）裕福だと思っていたので、問１Ｄ全く（お金の）心配する様子はなかったということだ。

　　論

人は、決して噓をついてはいけない。すべての教えが、噓を戒めている。た

だし、年老いた父母の心を慰め、心配をなくそうとして（つく噓）は、しか

たないことで、噓をつくこともあってよい。噓をつかないことを誇りとして、

父母が心配して恐れてしまいそうなことをも口から出るにまかせて言い散ら

すのは、人の子の心ではない。絵屋の噓は、問１Ｅもっともなことではないか。

噓をつくことで孝行心が（外に）現れている。